三人のシンデレラ

ぼうえんでぃる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人のシンデレラ

【Ｎコード】

Ｎ５５５４Ｑ

【作者名】

ぼうえんでぃる

【あらすじ】

この物語は、世界に散らばったシンデレラストーリーの内、もっと有名な三つのお話を一つにまとめたものです。※あらすじ：伝説に名高い、あのガラスの靴のお話から２０年経ったある日のこと。街を訪れた観光客は、一人の女性の口から、シンデレラの話に隠されたもう一つの物語を聞かされることになった。なぜ、シンデレラは選ばれたのか？　シンデレラを助けた魔法使いとは誰だったのか？　いま千年にわたる恋物語がひも解かれる！　（現在掲示板にて晒し中）

『エジプトの薔薇』ロードピス（前書き）

この作品はＰｉｘｉｖにある、いさおギルティさまの超美麗イラスト『シンデレラの魔法使いの恋』（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｍｅｍｂｅｒ｜ｉｌｌｕｓｔ．ｐｈｐ?ｍｏｄｅ＝ｍｅｄｉｕｍ&ａｍｐ；ｉｌｌｕｓｔ｜ｉｄ＝１２９５７３４８）にインスピレーションを得て、書かれたものです。
この作品を書くきっかけをもらったことについて、いさおギルティさまに深く感謝を捧げたいと思います。

では、貴女もあの有名なお話を聞いて、この街へやってきたのですね。

お話にあったさまざまな素晴らしいことが、本当かどうかを知りたくて心を鳩のように羽ばたかせながら。

わかりますとも。だって、２０年前にお城であの大舞踏会があり、王子さまが若くて美しい花嫁を迎えてから、貴女のような方が何人も、何百人もこの街へやってきたのですから。

そのたびに、私たち住人たちは同じ答えを返してきたものですよ。

「ええ、その通りよ！　貴女がたが耳にしたことは全てほんと！かぼちゃの馬車も、ネズミの召使も、真夜中の鐘と共にあの白い絹の形をした炎のドレスは消えてしまったけど、お城へ行けば名高いガラスの靴を見ることは出来るし、王子さまと灰かぶり（ああ、今は王さまとお妃さまでしたね）は愛らしく美しく賢い、息子や娘たちに囲まれて幸せに暮らしています」とね。

でも、貴女は不思議に思わなかったかしら？

あの夜、王子さまの舞踏会に出たく出られなかった娘さんは、たくさんいたわ。

なぜ、その中から灰かぶりが選ばれたのかしら？

なぜ、魔法使いの魔法は、真夜中の鐘に解けてしまったのかしら？

なぜ、ガラスの靴だけは、他の魔法の品々と一緒に消えてしまわなかったのかしら？

そもそも、かわいそうな灰かぶりを助けた魔法使いとは、誰だったのでしょう？

そう、貴女の知っている『灰かぶり』には、まだたくさんの『なぜ』が隠されているわ。
ふふふ、貴女は運のいい人よ。
この街の住人で、『灰かぶりのお話』を知らない人はいないわ。
でも、貴女の知りたがっている『なぜ』『どうして』に答えられる人間はたったの三人。
そして、私はその一人なのよ。

お時間は大丈夫かしら？　あら、よかったわ。
どうぞ、そこの椅子にお座りになって。
お茶を頼みましょう。お菓子もいるわね。
何しろ、長いお話なるのですから。

まず最初に、貴女の一番知りたがっていることについてお答えしましょうか？
『灰かぶりを助けた、魔法使いとは誰だったのか？』
その謎に答えるためには、時間の紡ぎ車を千年ばかり巻き戻す必要があるわね。
ときはギリシアにまだアテネがあり、詩人と哲学者たちが言葉を戦わせていたころ。
場所はナイルの河がとうとうと流れ、ファラオが支配するアフリカの北の端。

おや、ちょっと時間をさかのぼり過ぎていませんかって？
いえいえ、そんなことはありませんわ。
だって、全てはあのエジプトの大地から始まったのですから……。

1、『エジプトの薔薇』ロードピス

千年前、ギリシアの地に愛らしいひとりの女の子がいました。
その子の名はドーリカ。薔薇色の頬に、乳色の肌、髪の毛は秋の夕日を浴びた麦畑。
踊れば火のごとし、唄えば銀のごとし。
ドーリカはまさしく、ご両親にとっての生き甲斐であり喜びそのものでした。

しかし、ある日、ドーリカの誕生日に家族で旅行に出かけたときに、一家に不幸が襲いかかりました。不幸は髭面で曲がった剣を携えた海賊の形をしていました。
海賊たちはご両親を殺し、一家の財産を奪い、幼いドーリカをさらいました

酷い話ですね。でも、ドーリカの不幸はまだ始まったばかりだったのです。
海賊たちはドーリカの名前を変え、彼女を奴隷として売り飛ばしました。
こうしてドーリカはエジプト風にロードピス。
すなわち『薔薇の顔』と呼ばれるようになりました。

ロードピスは何度か主人を変えながら、最後にはエジプトで働くことになりました。
ロードピスの最後の主人は、イアドモンと言って、たいへんなお金持ちでした。
彼のお屋敷では、あの有名なイソップも奴隷として仕えていました。
しかし、お屋敷はあまり広く、召使いの数は多すぎて、イアドモンは自分の手の中にある『薔薇色の宝石』に気付かなかったのです。

ロードピスはこのお屋敷で、ずっと同僚たちに苛められてきました。
イアドモンの侍女たちは、少女をこき使い、自分たちの仕事を押し付け、主人の目に隠れてロードピスを叩きました。
頬を叩く手や残酷な鞭よりも、少女を傷つけたのが、同僚たちの言葉でした。

オリーヴ色の肌と黒檀の髪をした女たちは、事あるごとに自分たちとは違うロードピスの肌や髪の色をなじりました。
「あんたのその生白い肌なに？　何か変な病気にかかっているの？」
「薄気味の悪い目だね、青くて光ってまるで幽霊みたいだよ」
「気に食わない髪だね、抜いちまおうかしらね？」
頬をつねられ、髪を引っ張られるたびにロードピスは同僚たちの手から逃げて、炉辺でこっそり泣きました。
お母さまやお父さまから受けついた体を悪く言われることが何よりつらかったのです。

やがてロードピスは炉の灰を手に取ると、それを自分の身体に塗りつけるようになりました。
年上の侍女らになじられないように、金の髪や白い肌を灰の下に隠すようになったのです。
時間が経つにつれて、お屋敷の住人は薔薇の顔を忘れ、少女を汚らしく醜い娘だと思い込み始めました。

同じ奴隷で、変わり者のイソップだけは、ロードピスを我が子のように可愛がっていました。
イソップはときどき動物たちを主人公にした滑稽なお話を作っては、少女に話して聞かせました。
だが、それを除いては、卑しく醜い奴隷娘に近づく者もなく、ロードピスは常にひとりでした。

ロードピスの孤独と悲しみを慰めてくれたのは、月の光とそれを移す黒いナイル河の流れでした。
毎夜、少女で河の水で灰を洗い落とし、生まれたままの姿に戻りました。
そして、川のほとりで女神イシスのほこらの前で、踊り歌いました。
歌でご両親の思い出をよみがえらせ、優しかった記憶に心の傷を癒してもらったのです。

ある夜、屋敷の主人イアドモンは、偉大な客を迎えて盛大な宴を開きました。
お屋敷の住人たちは、主人の家族から奴隷に至るまで着飾って宴に参加しました。
だけど、奴隷の中でもいちばん地位の低かったロードピスは宴に顔を出すことを許されませんでした。

寂しくて、哀しくて、少女は再びナイル河へ走り、女神の前で踊りました。
このとき、ロードピスは十七歳。少女から女へと花開く年頃でした。
少女の体は月明かりを浴びた白い火柱、手を振るたびに花の香りを振り撒き、ひらめく足取りは稲妻そのものでした。

踊るうちに、ロードピスは悩みを忘れ、悲しみを忘れ、時間さえも忘れました。
そして、気付けば月は天高く登り、ときは真夜中、宴はとうに終わっています。
ようやく疲れを思い出した手足を休めようとしたそのとき、ロードピスは河岸にいるのが自分一人じゃないことに気付いたのです。

きらきらと星のように光る黒い眼が少女を見つめていました。
怖くなってロードピスはその場から逃げ去ろうとしました。
しかし、夜の闇から男の形をした影が飛び出し、豹のように素早く少女の手を捕らえました。
泣き出しそうになったロードピスに、男が優しい声で囁きかけました。

「静かに！　貴女を傷つけるつもりはありません。ただ何者か教えて欲しいだけなのです。貴女はナイルの女神なのか？　それとも砂漠の麗しい亡霊なのか？　ああ、名前を教えてください、月の光と踊る方よ」
「私は亡霊ではありません。ましてや女神などと畏れ多い……」男の声の熱さに慄きながら、ロードピスは言いました。「私の昔の名はドーリカ、今はロードピス。イアドモン様にお仕えする奴隷の一人です」
「貴女が奴隷であるのならば、イアドモンの目は節穴に違いない！　今宵の宴にはナイルに繁る麻のように踊り子が出てきたが、貴女ほど見事に踊る者は一人もいなかった。どうか、おみ足を貸してください。あの稲妻の如きステップを生み出した足をもっと良く見たいのです……」

ロードピスは渋りましたが、男の眼差しと言葉に抵抗することは出来ず、ついに言われるままに、たおやかな足を差し出したのです。
男は少女の足を手に取ると、すかさず懐に隠し持っていたサンダルを履かせました。
このサンダルがまた見事なものでした。なめした柔らかい子牛の皮を宝石で飾り、つま先には本物そっくりの薔薇の飾りがついていました。
サンダルはまるであつらえたかのように、ロードピスの小さな足

を包み込みました。

「ああ、やはり思ったとおり。ロードピス、貴女こそ我が運命の人。未来の花嫁に違いない」感極まった声で、男が叫びました。

「貴方はいったい誰なのですか？」すでに相手の正体に半ば気づきながら、ロードピスが聞きました。

そのとき、月を隠していた雲が風に流れ、一筋の光が少女と男を照らしました。

月光の下に現れたのは凛々しくもたくましい若者。

ライオンのようにしなやかな黄金色の手足を持ち、口には真珠と輝く白い歯。

若者が笑うとその華やかさに、夜が昼に変わったように思えました。

「私はアマシス。このナイルの河とメンフィスの都、そしてエジプト全てを支配するファラオである。そのサンダルは我が王妃となる人のために特別に作らせたものなのだ」

若く美しいファラオに結婚を申し込まれて、舞い上がらない乙女がいるでしょうか？

しかし、ロードピスはファラオの申し出に、喜びよりも不安と恐怖を覚えました。

吹雪の中で過ごしてきた人間は、ぬるま湯でやけどをしたと勘違いすることがあります。

不幸になれた少女の目には、希望の光があまりにまぶしく見えたのです。

「いけません！　私は卑しい奴隷。このような者と結婚しては御名が汚れます。家臣様の皆様も決して賛成しないでしょう」

「その謙虚なところがますます好ましい。だが、心配は要らぬ。策はあるのだ。ロードピスよ、その右足のサンダルを大切に持っておるのだ。私は左足のサンダルをメンフィスの都に持ち帰る。今日より三日後に、都で太陽神ラーをたたえる祭がある。そのとき、このサンダルを王家の隼に預けて、私の膝の上に落とさせる。そして、皆の前で宣言するのだ、『これはラーのお告げに違いない。私はこのサンダルの片割れを持った女性としか結婚せぬぞ』とな」

「果たして、そのように上手くことが運ぶでしょうか」ロードピスは不安げに聞きました。

「上手く行くとも！　家臣らは皆、信心深いのだ。王（ファラオ）の言葉に逆らう者はいても、神（ラー）のお告げを疑う者はいるだろうか？」

ここでアマシス王は少女を安心させるために、明るく笑いました。その声と笑顔の甘やかさに、ロードピスは不安どころか、骨の芯までとろけるのを感じました。

「一週間の後に、貴女を迎えに戻る。我が薔薇よ、それまで待っていてくれるか？」

「もちろんです。一週間が百日になろうとも、百日が千年になろうとも。必ずや待ち申し上げております！」

静かに流れるナイルと月に見守られながら、少女は王の腕に抱かれました。

騙されていると、心のどこかで疑いもしました。

若い男の中には、年頃の娘の気を引くために、このような嘘をつく輩がたくさんいましたから。

でも、ロードピスは王の言葉を信じることにしました。

辛く苦い毎日を生きるよりも、一時でいい、甘い嘘に浸りたいと思ったのです。

そしてアマシス王の言葉は全て真実でした。

三日目後に、メンフィスの都で太陽神の祭典がありました。
そこで、王の言葉通り、隼が神のお告げと一緒に薔薇の飾りをつけたサンダルを運んできました。
若いファラオが花嫁を捜しているという噂は、隼にも劣らぬは速さでナイルをさかのぼりました。
一夜の夢が現実だとわかったときのロードピスの喜びは、如何ばかりだったでしょう。
苦難の末に掴み取った幸運であっただけに、天にも舞い上がるような心地でした。

ところで、運命は人生にさまざまな落とし穴を仕掛けてきます。
ロードピスの人生には、特にたくさんの落とし穴がありました。
このとき、落とし穴は、同僚の侍女の形をとって、ロードピスの前に現れました。

イアドモンの屋敷に仕えるこの少女は、若きファラオを見て、一目で恋に落ちました。
アメシスが宴に飽きて、こっそり抜け出すのを見た侍女は、こっそり後をつけました。
あわよくばファラオの情けを、できるならば王妃の地位を望んでいた侍女が見たのは、いつも苛めていた奴隷娘が、王と月の下で愛し合う姿だったのです。
嫉妬に内臓が煮えくりかえるのを感じながら、邪な考えが侍女の頭を過りました。

「ファラオはサンダルを持っている娘としか結婚しない、と言っていた。つまり、あのサンダルを手に入れたら、私が王妃になるんだわ。王も言っていたじゃない、ファラオの言葉に逆らう者はいても、神のお告げを疑う者なしってね」

そして花嫁を求めて、ファラオが再びイアドモンの屋敷を訪れる日がやってきました。
その日、ロードピスは朝早くから、洗濯物を持って、ナイルの河岸に行きました。
第二の皮膚のように体を覆う灰を洗い流して、ありのままの姿でファラオを迎えようとしたのです。

王妃の証である薔薇飾りのサンダルは、水に濡れないように河岸に置かれていました。
この数日の間、影からロードピスの様子をうかがっていた侍女は、ここぞとばかり、薔薇のサンダルを盗みとろうとしました。
驚いたロードピスは、濡れた体を拭きもせずに河から飛び出し、サンダルを取り返そうとしました。

二人の少女はひとつの靴を奪い合って、ナイルのほとりで掴み合いの喧嘩を演じました。
そのとき、濡れたロードピスの足が石の上で滑りました。
激しい水しぶきを立てて、少女たちは河の中に落ちました。

侍女はロードピスを離すと慌てて、岸のほうへ泳いで行きました。
しかし、ロードピスは王との愛の品を握りしめ、そのために河の深みに流されました。
ナイルの流れは荒々しく少女の体を抱きしめ、冷たい水が肺を満たしました。
涙目のように歪む水面を見つめながら、ロードピスの体は深く深く、水の底へ沈んで行きました。

ファラオがイアドモンの屋敷に足を踏み入れたのは、その日の正午。

花嫁を探しにやってきた王が見つけたのは……冷たく水に濡れた少女の亡骸でした。
河の水は命と一緒に、ロードピスの美しさを隠していた灰を流し去りました。
このとき、屋敷の人々は少女の美しさを思い出し、王と奴隷娘の間に芽生えた一輪の花のことを知ったのです。

主人であるイアドモンは、知らぬうちに失われた財産の大きさを嘆きました。
イソップは娘のように愛した少女の死が信じられず、その場に立ちつくしたまま、泣きました。
のちに『ロードピスの靴』と言う物語が地中海の国々で流行るのですが、そのお話を作ったのは、もしかしたらイソップだったのかもしれません。

そしてファラオは、誰よりもロードピスを愛していたファラオは泣きませんでした。
張り裂けた胸の傷を埋めるように、氷のような少女の体を抱きして、呟きました。
「私が殺した」と言いました。「私が殺したのだ、ああ我が薔薇よ」
ファラオはロードピスの亡骸を都に持って帰り、そこで王妃に相応しい盛大な葬儀を上げました。
そして小さなピラミッドを建て、そこに少女の体を納めたのです。

地上に残ったロードピスの体の顛末はこの通りでした。
一方、体を離れた少女の魂(カー)は、まだナイルの河をさまよっていました。
水の流れに乗って漂ううちに、ロードピスは河の底を照らす豪華

な宮殿に辿り着きました。

石垣のひとつひとつまで、輝く宝石で来たその宮の中で、魂は眼を覚ましました。

ロードピスの魂は、自分が見上げるほど巨大な女性の掌の上にいることに気付きました。

朝日を浴びた雪山のように、白くも美しくその女(ひと)は、気を取り戻したロードピスに笑いかけました。

「目を覚ましたか、ロードピスよ。私はイシス、ナイルの女神である」

「おお、偉大なるイシス。私はどうなったのですか？」畏怖に震えつつ、少女は言いました。

「お前は溺れて死んだのだ、娘よ。助けてやりたかったのだがな。私は月と海と夜の女神。昼間は我が息子、ホルスの支配する時間ゆえ、手を貸してやれなかった」

女神の言葉を聞いた途端、少女は全てを思い出しました。

皮膚を切り裂く河の冷たさを、肺を刺す塩辛い水を、そして指先から這い上る死の感触を。

何にもまして、厳しく魂を苛んだのは、飲み干す寸前で奪われた幸せの盃の感触でした。

胸に空いた穴の大きさに、言葉どころか心まで見失った魂に、女神が話しかけました。

「ロードピスや、私はお前を憶えておる。お前が毎夜、私に捧げた踊りを憶えておる。その激しくも麗しい足取りを憶えておる。私には幾万人の巫女がおるが、誰一人としてお前のように踊る者はいない。その舞の褒美を与えたい。復讐を望むか？　それとも亡き母や父の影と話がしたいか？　どれも容易いことよ。何なりと申してみ

よ」

イシスの申し出はどちらも、魅力的なものでした。

しかし、とっさにロードピスの心に浮かんだ願いは、まったく違うものでした。

「では、私を生き返らせて下さい。王との約束を全うするために、いま少しの時間を下さい！」

「残念ながら、それは叶わぬ願いだ」目をひそめて、女神が言いました。

「どうして！　かつて貴女は兄であり夫であるオシリスを生き返らせたではありませんか！　神を生き返らせることも出来るのに、どうして人間一人蘇らせることが出来ないのですっ？」ロードピスは叫びました。

「そうではない」イシスは首を横に振りました。「お前を生き返らせることはできる。しかし、蘇っても、お前が王と結ばれることはないだろう。アマシスはお前が死んで間もなく、病を得て、この世を去った。その魂は肉体を離れ、生まれ変わっている」

「ならば、私も後を追います！」少し考えてから言いました。「ファラオを見つけるために、現世の記憶をとどめたまま、生まれ変わらせて下さい」

イシスは哀しげに眉をひそめ、子猫を撫でるように人差し指で少女の頭を撫でました。

「ああ、お前は何わかっておらんのだ、娘よ。魂にとって前世の記憶をとどめたまま、生まれ変わるのは拷問。お前は幾度も誕生と死を繰り返し、素足で果てしない氷の砂漠をさまようことになる。しかも、いつも人間に生まれるとは限らない上、お前の愛しい王に何時追い付けるかもわからないのだぞ」

「構いません！」女神の手の中で、ロードピスは胸を張りました。
「この胸の中に燃える一輪の薔薇があります。その花が、心臓を棘で刺しながら、私に言うのです。たとえ、百回生まれ変わり、千年経とうとも、必ずアマシスさまの魂を見つける、と」
「ならば行くがいい、薔薇の娘。その背中にある翼を羽ばたいて、輪廻の中へと……」

突然、ロードピスの魂は、自分の背中に真っ白な羽根が生えていることに気付きました。
イシスに礼を言うと、魂は翼で水を煽いで、女神の宮殿から飛び出しました。
遥かな水面とファラオの魂を求めて、高く高く登りつめて行きました。
その先に恐ろしく長い時間と数奇な運命が、待ち受けていることも知らずに……。

第二話『灰猫』のゼゾッラに続く

『灰猫』ゼゾッラ

水面を突き破ったと思った瞬間、ロードピスの魂は暖かく湿った闇の中に飛び込みました。
そして、一息つく間もなく、魂はその優しく居心地のよい場所から追い出されました。
目に見えない手が、柔らかくもろい体の背中を押します。
魂は熱い苦痛を経て、暗く狭いトンネルを通り、はるか彼方にある光の中へと……

「こりゃ、おめでとうさん！　また女の子だよ」

取り上げたばかりの赤ん坊を見ながら、産婆は三本しか歯のない口で、呟きました。
ロードピスであった魂は、喉を刺す空気の冷たさと胸を刺す不安に泣き声をあげました。

2、『灰猫』のゼゾッラ

その第二の人生において、少女の魂は北の大地に住まう農民の夫婦の娘となりました。
すでに奴隷ではありませんでしたが、ある意味、奴隷以下の存在でした。

娘の家は貧しいくせに子沢山、上には三人の兄姉がいて、そこへ三人の弟と妹が加わりました。
一日の大半は、幼い兄弟の世話や牛の乳搾り、洗濯や畑仕事や家畜の世話に費やされました。

雑草のようにわいてくる仕事をさばきながら、娘はここから逃げる方法を考えていました。
何とかして、この農村を抜け出し、同じように生まれ変わっている王の魂を探し出さねば……。
しかし、村の人間たちはエジプトの奴隷よりも無知で、山の向こうに何があるのかさえ知りません。
娘自身も一人旅の経験がなく、どこをどうやって捜せばいいのか、まったく分かりませんでした。

悩むうちに時間だけが経ち、ある日、畑から顔を上げた親父は、娘が乳臭い子供から一人前の女になろうとしていることに気づきました。
その夜、たいして量の多くない晩ご飯を奪うように食べ終わった後に、親父は娘に言いました。

「おい、娘や。おめえも、もう嫁に行ってもええ歳だ。マイルズおやじ家のジョンなんかどうだ？　あいつは牛のように頑丈だぞ」
「そして頭の中身も牛並みよ。あたしはジョンのお嫁にはならないわ！」娘はきっぱりと言いました。
「なら、猟師のハックは？　あいつは情け知らずで、腕が良い猟師だ。おまえ毎日、肉が食えるぞ」
「ハックは女の子にも残酷で情け知らずよ。あたしはハックのお嫁にはならないわ！」
「粉屋のスノットなら文句はねえだろ！　あいつの家は、村一番の金持ちだ。嫁げば、焼きたてのパンが食えるぞ。家にもおすそ分け

がくるかもしれん」
親父の声には抑えきれない怒りがふつふつと、湧き出していました。
食卓の周りの家族は、息を殺し、必死に親父の言う通りにするように娘に目配せしました。
しかし、娘の答えは変わりませんでした。
「いやよ。あたしはスノットのお嫁にはならないわ」
「なら、どこの野郎だったら、結婚するって言うんだっ！」
ついに怒りを爆発させた親父は、こぶだらけの手でテーブルを叩きました。
木の皿の幾つかが、その勢いで宙に舞い上がり、床に落ちて騒々しい音を立てました。
娘は熊みたいな親父の怒りにも動じず、毅然とした態度で言いました。
「ファラオのアマシスさまなら、結婚するわ」
「ふ、ふぁらって……そりゃ誰のこったぁ？」
「ファラオはエジプトの王よ。そして、アマシスさまこそ、あたしの運命の相手だわ。あたしは、いつかこの村を出て、アマシスさまを捜しに行くのよ」
農民の親父は娘の言葉が理解できませんでした。
だが、無知な人間の常で、戸惑いは怒りの火に油を注いだだけでした。
親父は大きな拳を娘の鼻先に突きつけて、脅すような声で言いました。

「優しくしてりゃ、つけあがりやがって。親父さまの言うとおり結婚するか、さもなきゃ、こいつで一発食らわせるぜ！」

王女のように、誇り高く優雅に反らした顔がその答えでした。怒りで顔が真っ赤になった親父は、言葉通り、強烈な一撃を娘の頬にお見舞いしました。

しかし、あまりに強く殴りすぎたために、娘の体は椅子ごと倒れました。

そして、土の床から突き出した尖った石が、運の悪い娘の頭を砕きました。

ロードピスの魂は傷口から血と一緒にこぼれ出て、嘆き悲しむ家族を残して再び飛び立ちました。

その三度目の人生において、ロードピスの魂はローマの令嬢となりました。

今度の父は、富と権力に取り付かれた大貴族で、新しく生まれた娘を掌中の玉のように扱いました。

なぜなら、貴族にとって娘は、将来結婚によって、さらなる富と権力を生み出してくれる大切な財産だったからです。

前回や前々回と違い、この人生でロードピスの魂は働く必要はありませんでした。

貴族の娘にとって、洗濯や畑仕事よりも、良縁に恵まれるよう美貌や教養を磨くことが重要だったのです。

すでにふたり分の人生を経験していた魂は、その覚えの速さで教師を唸らせ、両親を喜ばせました。

十五年の間、奴隷の魂は貴族として、楽しく贅沢に暮らしました。

しかし、十五歳になったその日に、あの煩わしいやり取りがまた始まったのです。

貴族の父親は、今まで手塩をかけて育ててきた花から、甘やかな果実の見返りを期待しました。

「可愛いわたしの花よ。今日は、おまえにうれしい知らせを持ってきたのだよ」

「ああ、お父さま、結婚のことでしたらごめんなさい。わたくしには心に決めた方がいるんですの」

娘の言葉は、ナイフのように父親の誇りを傷つけ、傷口から真っ赤に煮えたぎる血がこぼれました。

しかし、農民よりも陰謀に長けた貴族は、怒りを面に出しませんでした

「おお、娘よ。すでに意中の相手がおるなら、無理強いは出来ぬな。だが、せめてお前の心を射止めたその運のよい男の名を教えておくれ」

頭の中で、娘に近づいた男と知り合いの暗殺者の名前を並べながら、猫撫で声で聞きました。

ところが、娘の口から飛び出した名は、父親にとって思いもよらぬものでした。

「わたくしが、恋しているのはアマシスさま。エジプトの王であらせられた方です。かつてわたくしはロードピスと呼ばれる奴隷でした。運命によって、アマシスさまに求婚をされたのですが、意地悪な同僚によって命を落としたのです。そのあとに、わたくしは女神イシスのご加護により、生まれ変わり、お父さまの娘になりました。私と同じようにアマシスさまもどこかに生まれ変わっているはず。お願い、どうかわたくしのために、アマシスさまを見つけてください！」

今まで、貴族は我が子にきわめて甘く、頼みを拒んだことは一度もありませんでした。
娘は、今度も父親はこころよく自分のお願いを聞いてくれるものと思っていたのです。
しかし、貴族の父は乱暴に娘を押しのけると、嫌悪と怒りの篭った視線を投げかけました。

「大神ユピテルよ、救いたまえ！　我が子は邪教の悪魔に取り付かれたのだ。もはやお前をこの家においておくわけにはいかん！」

腐った林檎が同じ樽の実を腐らせるように、貴族は娘の狂気が、他の子供たちに伝染するのを恐れました。
そこで、風評が広がる前に、狂った（と思い込んだ）我が子を僧院の中に閉じ込めたのです。
美しいものに取り巻かれていた少女は、残りの人生を、泣き叫ぶ狂人や陰気な神官の中で過ごしました。

六十年の間、ロードピスの魂は貴族の娘の体の中に囚われていました。
やがて皺一つない肌に、時が爪あとを刻み込み、まっすぐだった腰は曲がり、白い歯は抜け落ちて、薄いかゆをすすることしか出来なくなったころ、やっと死がやってきて、魂を老いた牢獄から解き放ってくれました。

そして同じようなことが何度も繰り返されました。
かつてイシスが予言したとおり、少女の魂は長い氷の砂漠を彷徨うことになったのです。
毎度おなじみの苦痛に満ちた出産のトンネル。
その後に続く貧困と虐待、老いや病気、侮蔑や孤独、そして何十

通りもの死。
恋人の生まれ変わりを求めて旅に出、盗賊に殺されたこともありました。
悪魔憑きとして、罵られながら、処刑台の上に立ったこともありました。

またいつも人間に生まれるわけではなく、魂が卵の殻や獣の毛皮の中で目覚めることもありました。
そのようなとき、魂はすぐに巣から抜け出すか、捕食者の口の中に飛び込み、人間に生まれ変わるまで、何度も死の門を潜り続けました。

いつしかロードピスだった魂は、歌を忘れました。踊りを忘れました。
唯一つ、ナイルの河のほとりで芽生えた、あの花だけは萎れることなく咲き続けましたが、その花の上にも時間の黒い雪が降り積もっていきました。
貝が薄い膜を重ねて石を真珠を変えるように、恋の花は墨色の冷たい殻に覆われ、棘はますます鋭く、花弁は剃刀となりました。

最初の百年が過ぎた後、魂は思いました。
『たとえ、どこにいようとも、必ずアマシスさまを見つけ出してみせるわ』
次に二百年が過ぎた後、魂は思いました。
『たとえ、あの人がほかの人間を愛したとしても、また私を愛するようにしてみせる！』
三百年が過ぎた後、魂は思いました。
『誰であれ、わたしとアマシスさまの間に立ちふさがる奴は、皆殺しにしてやる！』

そして百年、また百年、さらに百年……。
ついに千年の時が経ち、百度目の人生において、魂は『灰猫』のゼゾッラとなっていました。

◆　◆　◆

表の世界では、ゼゾッラは社交界に咲いたミステリアスな華でした。
孔雀のように色鮮やかドレスを纏い、手には大粒の宝石の指環、髪を飾るは生きた薔薇。
その顔には貴石も花も色褪せ、眼差し一つで何人もの若者が恋に落ちました。
しかし、ゼゾッラの髪の毛だけは、何故か老婆のような灰色でした。

灰髪の令嬢の懐は金で満たされていましたが、その富の出所を知る者はいませんでした。
貴族よりも優雅に振る舞うことが出来ましたが、どこの生まれなのか、誰にもわかりませんでした。
そしてもう一つの世界、月と闇が支配する、呪文と象徴の世界では、『灰猫』の名は漆黒の栄光に包まれ、暗黒の太陽のように輝いていました。

生まれ変わりを繰り返す魂が、魔法を学び始めたのは、何時のことだったでしょうか。

初めは世界のどこかにいるファラオの生まれ変わりを探すために。
次いでは、耐えず襲いかかる理不尽な暴力から自分を守るために。
最後には、力を身につけることそれ自体を楽しみとするようになっていました。

親が子に財産を残すように、魂は生まれ変わるたびに、黒い知識の石材を一つ積み上げました。
やがて石材は幾重にも層をなし、千年の時を経て、魔法の世界にそびえ立つ巨大なピラミッドとなっていました。
魔法の世界の住人たちは、羨望と畏怖を込めて、暗黒の塔の上に君臨するゼゾッラを讃えました。

ああ、麗しのゼゾッラ。
ああ、恐ろしのゼゾッラ。
天を指させば嵐を巻き起こし、地を踏めば地獄の炎が噴き出す。
絹糸を紡いで金となし、金に触れては鉛に変える方よ。
魔法の女神イシスの加護を受け、十世紀を生きた、不死不滅の大魔法使い！
荒野の魔女たちも、地底の魔物らも、ゼゾッラの前にはひれ伏し、その爪先に口づけをしました。

ゼゾッラの妖しいオーラは、甘い蜜のように若い男たちを引き寄せました。
しかし、『灰猫』自身が、男たちの熱い口説き文句に心を動かされることはありませんでした。
長い暴力と抑圧の果てに、唯ひとりを除いて、全ての男たちを恨み、蔑むようになっていたのです。

ゼゾッラは寄ってくる若者らを或いはもて遊び、或いは無視し、その心を一つ一つ丁寧に打ち砕いて行きました。

かくして、『灰猫』の歩いたあとには、男たちの砕けた恋と涙が、足跡のように残されるようになったのです。
毎夜、社交界で愚かな男を破滅させた後、ゼゾッラは邸宅に戻り、地下の部屋に隠された水晶玉の前に立って言いました。

「水晶よ、地の底の賢者よ、遠見の目よ、私の声が聞こえるか？」
「はい、貴女の声が聞こえます、ゼゾッラ」水晶は答えました。
「よろしい。では聞くわ。私のアマシスさまはどこにいるの？　黒い森の国で私が探しに来るのを待っているのかしら？」
「いいえ、ゼゾッラ、アマシスがどこにいるのかはわかりません。王の魂は黒い森の国にはいません」

毎晩毎晩、同じやり取りが繰り返されました。
アマシスの生まれ変わりはどこにいるのか、今何をしているのか？
黒い森の国でないのなら、葡萄酒の国は？
熊と狼が徘徊する北の大地は、駱駝の行きかう砂漠はどうだ？
遠い遠い東の絹の帝国や、さらに東にある黄金の島国を覗き見た事もありました。

だが、水晶玉の答えはいつも同じでした。
『いいえ』『いいえ』また『いいえ』！
アマシスの魂はどこにも見つかりませんでした。
何年もの時間が過ぎ、今世での再会を諦めかけたその頃、一人の青年がゼゾッラの前に現れました。

青年は絹の商人で、一代で財をなした立身出世の人でした。
いつもと同じように、ゼゾッラは青年の心をその爪で引き裂き、唾を吐きかけました。
しかし、青年は一時はひどく落ち込みますが、しばらくするとまた戻ってきました。

ゼゾッラの心の中にある、黒い花の棘に刺され、するどい花弁に何度切り裂かれても、また同じように手を伸ばしてくるのです。
とうとう、呆れた『灰猫』は青年に尋ねました。

「どうして、お前はそんなに、私に構うんだい？」
「真っ赤に凍えた手を見たなら、温めてあげたくなるのが、人情じゃないか」青年は笑って言いました。「それに君の手は僕の好みなんだよ」
「はん、大した口説き文句だこと。だけど、その程度じゃ私の口から『愛してる』なんて言葉は出てこないよ。温もりが欲しけりゃ、氷を抱きな。水が欲しけりゃ、石を絞ることだね」

ゼゾッラは青年の言葉を鼻で笑いました。
ところが半年後、社交界は『灰猫』が商人のプロポーズを受け入れたことを知りました。
と言っても、別にゼゾッラが、青年のしつこい求愛に心を動かされたわけではありません。
お人好しの絹商人を騙して、その財産を根こそぎ頂いてやろうと、思っただけなのです。
そもそも『灰猫』の山のような富は、そのようにして築いた物なのです。

いつもと変わらず、次に生まれ変わるまでの時間をつぶす、ただのゲーム。
最初は、そう、そのつもりでいました。
しかし、青年と一緒に暮らすうちに、ゼゾッラの身に思いもよらぬことが起こりました。

千年にわたる生涯で初めて、『灰猫』は母親になったのです。
生まれた赤ん坊は女の子で、父親に似たところがあり、母親にも

似たところがあり、しかし誰よりも……ナイル川でおぼれ死んだあの少女、ロードピスにそっくりでした。

ゼゾッラは赤ん坊を怖がりました。
何を滑稽な、と思うでしょう。
しかし、千年を生きた大魔法使いは、小さな柔らかい生き物に本気で怯えていたのです。
子供は乳母に預け、自分の手で抱くことはおろか、目を向けることさえ稀でした。

溢れるほど知識が持ちながら、我が子にどうして接していいのか、わかりませんでした。
十世紀も恋焦がれてきたのに、愛し方を忘れてしまったのです。
しかし、時は過ぎて行きます、辛い時や苦しいときと同じように。

続く十数年間は、取り立てて語るようなことはありません。
ごく平凡で幸せな毎日が続いていただけでした。
ゼゾッラは普通の女のように、春に夫や子供と遠足に出かけ、夏に湖で水遊びをし、秋に親子で宴の食卓を囲みました。

そうするうち、ゼゾッラの花を包み込んでいた氷の殻は、一枚また一枚と剥がれ落ちて行きました。
「愛している」と口に出して言うことはありませんでしたが、抱き寄せる夫の腕にそっと体重を預けるようになりました。
また、おそるおそる我が子の手を握ることもできるようになりました。

家族と接する時間が増えるたびに、地下の魔法の部屋を訪れる時間は減っていきました。
毎日行っていた水晶玉への質問も、月に一回程度になりました。

そしてある冬のこと、魔法の道具の埃をはらうために、地下に降りたゼゾッラはふと悪戯心を起こして、水晶玉に尋ねました。

「水晶よ、地の底の賢者よ。遠見の目よ、私の声が聞こえるか？」
「はい、貴女の声が聞こえます、ゼゾッラ」水晶は答えました。
「よろしい。では聞くわ。私のアマシスさまはどこにいるの？　ひょっとして……この国いるんじゃないの？」

ゼゾッラはいつもと同じ返事が返ってくると思っていました。
水晶玉が『いいえ』と答え、そして平和で平凡で、幸せな毎日が続くと考えていました。
だがしかし、水晶玉の答えは、

「はい、ゼゾッラ、エジプトのファラオ、アマシスの魂はこの国にいます」

ゼゾッラの血は、血管の中で沸騰すると同時に凍りつきました。

「……なん、ですって？」
「ファラオ・アマシスはこの国にいます。お城にいる、王の長男がその生まれ変わりです。お望みなら、お顔を見せましょうか？」

夢見心地のまま、ゼゾッラはうなずきました。
すると水晶玉の中に渦巻く雲が生じました。
その雲が晴れた後に、ゼゾッラの娘と同じ年頃の、美しい少年が映し出されました。
まだ幼い少年の横顔に、ゼゾッラは紛れもないアマシスの面影を見いだしました。
間違えるはずもありません。気が遠くなるほどの時間、探し求めていた相手なのです。

遠く険しい道のりを経て、魂はついに恋するファラオに再会しました

しかも、王の魂は、ナイル川のほとりであったあのときと同じく、王族の男子に宿っているのです。

たとえゼゾッラでなくとも、この千載一遇の出会いに運命を感じずにはいられなかったでしょう。

しかし、大きな問題が、魂の歓喜に影をさしました。

ゼゾッラはすでに結婚をしております。それどころか、子供までいます。

絹商人の夫がいる限り、念願かなって王子と結ばれることはあり得ないのです。

この問題を解決する方法はただ一つ……。

その方法を思いついた時、ゼゾッラが激しく躊躇ったと言えば、おかしいと思いますか？

家族と一緒に過ごした日々は、魂の花を覆っていた氷の殻を何枚も剥がしていたのです。

しかし、最後の、最も分厚い殻だけは残っていました。

この機を逃せば、次は何時アマシスの魂に巡り合えるか、分かったものではありません。

そしてそのとき、ファラオの魂が、王族の中に宿っていることはないでしょう。

諦めるには、余りに長い間、恋焦がれてきました

立ち止まるには、氷の砂漠を遠く、引き返せないところまで歩いてきたのです。

その夜、ゼゾッラの娘は、母が冷えた暖炉の前で泣いているのを

見つけました。
毅然として、にっこりすることすらなかった母が子供のように涙を流していました。
娘が近づくと、ゼゾッラは河で溺れた人のように我が子にしがみ付きました。
戸惑った娘は、わけもわからず、母の背中を撫で、慰めました。
しかし、もしこの時、母の心中を覗いたら、娘の小さな心臓は脈打つのをやめていたかもしれません。

次の日、健康で風邪一つ引いたことのない商人が、原因不明の病気に倒れました。
ゼゾッラは使用人たちを退けて、自ら夫の世話をしました。
彼女をよく知る人々は、あの『灰猫』が良き妻になったことに驚き、心を打たれました。
そして、仲睦まじい夫婦を襲った不運を悲しみ、絹商人の健康と回復を祈りました。

昼間、ゼゾッラはつきっきりで夫の看病をしました。
彼女が手渡す薬を飲むたびに、商人は一歩ずつ、死の顎に近づいて行きました。
そして夜になると、地下の秘密の部屋に行って、水晶玉越しに見る王子に魔法の手を伸ばしました。
丹念に巣を張る蜘蛛のように、呪文の糸で少年を包みながら、ゼゾッラは水晶玉にささやきます。
「蝶よ。蝶よ。美しい魂の蝶よ。もう逃げさない。今度こそ、貴方は私のものになるのよ」
王子はその夜、不思議な夢を見ました。
夢の中で少年は途方もない大河の側に立ち、薔薇の顔と麦の髪を

した乙女に求婚をしているのです。
目を覚ましたあと、夢は忘却の彼方に去りましたが、不思議なざわめきが胸の中に残されました。
何か、とても大事なことを忘れているような気持ちになりました。
またワインのグラスに口をつけたときに、誰かに口づけをされたように感じました。
お城の庭の中で、見慣れないが後姿を見かけたこともありました。
その人は灰色の髪をしていて、追いかけると霧のように消えうせてしまったのです。
あい続く幻は、少年の心に小さな空白を残しました。
やがて、その白い傷は寄り集まって、パズルのように一つの形を作りました。
覚えはないのに懐かしく、見たことはないのに美しく、燃えるように慕わしい女の影を。

少年を完璧に魔法の虜にすると、ゼゾッラは次の仕事に移りました。
王子との結婚に反対できないように、王を王妃を大臣たちを、ついにはお城を丸ごと呪いの罠の中に落とし込みました。
若さと美しさを取り戻すための妙薬を調合し、魔法の糸を使って、太陽よりも輝かしく月よりも妖しく光るドレスを紡ぎだしました。
さらに地上の星と見紛う装飾品の数々を、かぼちゃの形をした黄金の馬車を、その馬車に繋ぐ見事な白馬を、次々に魔法で造り出しました。
王子の花嫁となるものが、みすぼらしい格好をしているわけにはいけません。
やるべきことは、いくらでもありました。
中でも、ゼゾッラが特に力を入れたのは、靴でした。

かつてアマシス王から送られた愛のしるし。
ロードピスに希望を与え、命を奪い、百度生まれ変わるきっかけを与えたあのサンダル。
あれも見事な靴でしたが、『灰猫』はもはやサンダル程度では満足できませんでした。
千年間の旅路は、その忍耐に相応しい報酬を求めていたのです。

ゼゾッラは地下室に人の骨のチョークで図形を描き、香炉をたいて呪文を唱えました。
魔法の鞭を一打ち鳴らすと、図形から黒い煙が立ち上り、地底の生物らが現れました。
この魔物達は、鼠に似た小人どもで、青黒い毛皮の下に緑色の鱗を生やしていました。
ゼゾッラは雷のようにビンビンと木霊する声で、小人たちに命じました。

「よく聞け、お前たち。お前たちの内、一人はこの世で最も高い山へ行き、そこの悪魔の心臓よりも黒い石を取っておいで。もう一人は地の底に行って、そこで赤く煮えたぎっている炎を持ってきなさい」
「その石と火で、何をなさるおつもりなので？」小人のひとりが聞きました。
「高山の石を地底の火で溶かしてガラスとなし、そのガラスで靴を作りなさい。その靴は、一度完成すればダイアモンドよりも硬く美しく、火で溶けることはなく、上等な革靴のように伸び縮みするの」

そのとき、大昔にロードピスが靴を奪われかけて、溺れ死んだ記憶がよみがえりました。
喉にナイルの塩辛い水を味わったゼゾッラは、注文をつけ足しま

した。

「……そして、その靴は、この世でただ一人の足だけを受け入れるのよ。いかなる知恵も、魔法さえもこの靴を欺くことは出来ないわ」

「相変わらず、『灰猫』の奥方は無理難題ばかり言いなさる」小人たちがぼやきました。

「無駄口を叩いている暇があったら、さっさとお行きっ！！」

ゼゾッラが魔法の鞭をぴしゃりと鳴らすと、小人たちは悲鳴を上げながら、それぞれの仕事場へ逃げて行きました。

こうして時間の針が少しずつ少しずつ、絹商人の死とゼゾッラの魔法の成就に向けて動き続けたのです。

◆

◆

◆

さて、絹商人の屋敷では、一人の未亡人が働いていました。

この人の名を、そう、ハンナと呼びましょうか？

ハンナは綺麗好きで働き者の、心優しい女性でした。

絹商人の妻であるゼゾッラは、我がままで無慈悲な女主人でした。

彼女のもとで働き、心と体をぼろぼろにされて、屋敷から逃げ出した使用人は数え切れません。

しかし、ハンナだけは奥方の無体な要求にもよく耐え、お屋敷をいつも綺麗に快適に保ってきました。

ハンナにはお屋敷から離れられない理由がありました。
一つはお給金の良さ、ハンナには育ち盛りの可愛らしい二人の娘がいました。
この娘たちを路頭に迷わせないために、ハンナは残酷な女主人のもとで働き続けました。

そしてもう一つの理由は……恋でした。
ハンナは屋敷の主人に恋をしていました。
燃えるような激しい恋ではなく、静かな、しかし大地の底に根を伸ばす深い愛でした。

恋に落ちるきっかけは、石のように、そこら中に落ちていました。
絹商人は浮気をすることはなかったけど、全ての女性に優しい男でした。
ハンナがゼゾッラの心ない言葉で傷つき、泣いていたときは背中を撫でて、慰めてくれました。
子育てで悩んでいるときは、親身になって、相談に乗ってくれました。
お金に困っているときはこっそりお給金を水増しして、クリスマスには二人の娘に絹のドレスを着たお人形をプレゼントしてくれました。

恋せずにはいられませんでした。愛さずにはいられなかったのです。
亡き夫の面影は夜明けの月のように薄れ、今では主人がハンナの新しい太陽でした。
しかし、叶わぬ想いだとわかっていました。
商人は妻を深く愛し、決して彼女を裏切らない人だったのです。
それでもハンナは、主人の側にいるだけで幸せでした。
彼の横顔を遠くから盗み見て、たまに微笑んでもらうだけで満足

だったのです。

それなのに、ああそれなのに……。

絹商人が病の床についてからというもの、奥方さまは使用人らを遠ざけて、誰一人主人に会わせてくれません。

ハンナは落ち着きを失い、不安を紛らわせるために、寝る暇も惜しんでお屋敷を掃除しました。

そして気付けば、屋敷中を鏡のように磨き上げていたのです。

不安に追い付かれそうになったハンナは、掃除する場所を必死に探しました。

そして、絶対に入ってはならないと言われた、あの秘密の地下室を思い出したのです。

「私がこのお屋敷に来た時から、あそこは奥さまがご自分で掃除して来たわ。でも、この数日、あの人はご主人さまの看病で忙しくて、地下室に行っていない……。今なら、ちょっと掃除しても、怒られないんじゃないかしら？」

そう思った時には、ハンナは地下室に通じる階段に足を乗せていました。

一歩また一歩、階段を下りて行くハンナの耳に奇妙な音が聞こえてきました。

それはきぃきぃと耳障りな鼠の鳴き声のようなしゃべり声でした。

恐怖で喉がからからになりながら、ハンナは地下室の扉に耳を押し当て、中の会話を盗み聞きしました。

『きぃきぃ、急げや急げや』とその声は言っていました。

『きぃきぃ、急いで靴を作るのだ。急がないと『灰猫』の奥さまに怒られるぜ。怒った奥さまがわしらをひと飲みにするぞ』

『奥さまが王子さまと結婚するときに履く大事な大事な靴じゃ。じゃけど、奥さまにはもう旦那がいるんじゃろ？』
『そうだ、結婚するには邪魔なコブだ。きぃきぃ。ゼゾッラさまがコブをどうするのか、恐ろしや恐ろしや、とても口に出しては言えぬ』

ハンナは掃除の疲れも忘れて、階段を駆け上がりました。
主人が与えてくれた部屋の中に飛び込むと、鍵を閉め、そこで泣き出しました。
涙が次に次にこみあげましたが、胸の中にあるのは吐き気を催すほどの激怒でした。

美しい人だと思ったから、主人に相応しい人だと思っていたから我慢してきました。
ああ、それだと言うのに、あの女はこの世で最も優しく素晴らしい男性を騙しました。
それどころか、自分が王子と結婚するために、彼を殺めようとしているのです。
なんという裏切り！
なんという邪悪！！
なんという……！！

だが、どうすれば良いのか。
こんなことを話しても、誰も信じてくれないでしょう。
それどころか、狂っていると思われ、お屋敷から追い出されるかもしれません。
そうなったら、一体、誰が可哀相なご主人様をゼゾッラの魔の手から守るのか？

このとき、善良な普通の女性だったハンナの頭に恐ろしい考えが

浮かびました。
もしばれたら、間違いなく、魔女に八つ裂きにされます。
しかし、ハンナは少しも躊躇しませんでした。

愛しいあの人を守ることが出来るのなら、喜んで地獄に落ちるつもりでいました。
恋が人を変えたのです。愛が人を強くしたのです。
ハンナの心の中に、一筋の勇気が、火柱のように燃え上がりました。

ついに絹商人が床に伏せてから七日が経ちました。
キリスト教の神が世界を作り終えて、休息を取ったと言うその日に、ゼゾッラの魔法の靴はついに完成しました。
あと一日で千年にわたる苦行に終止符を打ち、その後にロードピスが願ってやまなかった幸福が始まる……そのはずでした。

ゼゾッラの心に喜びはありませんでした。
地下室の階段を踏む足取りは重く、骨の中に疲労の鉛が詰まっていました。
今願ってやまないのは、何もかも忘れて、七日ぶりにたっぷり眠ることだけです。
大広間を通るときに、亡霊のような顔をしたハンナが立っていました。

「奥さま、お疲れのことと思って、ミルクを入れたお茶を入れておきました。どうぞ、おあがりください」

この時、もしハンナの顔を見ていたら、
或いはカップを握る手に走る、かすかな震えに気付いていたら……。

ゼゾッラは普通の人々が本を読むように、ハンナの心を読み取っていたことでしょう。
そして魔女は身ぶりか眼差しの一つで、ハンナの体を粉々に砕くか、一筋の煙に変えて吹き飛ばしていたでしょう。

しかし、ゼゾッラは疲れ過ぎていました。
連日の魔法もさることながら、夫に毒を盛るたびに、幸せだったころの記憶が、水を吸った海綿のように膨れ上がって、背中に圧しかかるのです。
罪の意識に溺れて、息がつまり、まともにものを考えることができなくなっていました。

ゼゾッラはさし出されるままに、お茶を受け取り、一息で飲み干しました。
そして倒れて、直ちに息を引き取りました。
続いて、なんと凄まじい衝撃が、屋敷を襲ったことでしょうか。

屋根の上で黒雲と稲妻があれ狂い、地下室の中で魔法の水晶玉が粉々に砕け散りました。
魔女に呼び出された魔物たちは、魔法に縛られたまま、力を失いました。
白馬は白い子鼠に、小人らは黒い子鼠となって壁の穴の中に逃げ込みました。
魔女たちは大釜を覗いて、星占い師たちは星を見上げ、錬金術師たちはフラスコの中に、大魔法使いの百度目の死を悟りました。

絹商人は病床の中でゼゾッラの死を知り、病をおして妻の葬儀を催しました。
その嘆き様はたいへんなもので、多くの人は商人が葬儀の席でなくなるのではないかと心配しました。

ハンナは主人に何も告げませんでした。
ゼゾッラの恐ろしい企みについて黙ったまま、ただ主人の隣に寄り添い、倒れそうな彼を支えました。
ときは流れ、男と女は寒空の下で温もりを求めあう人のように、少しずつお互いの距離を縮めて行きました。
やがて、絹商人は屋敷の中に新しい妻を迎え入れ、ハンナは彼女の太陽をついにその手に掴み取ったのです。

こうして、一人の女性の勇気と勝利の物語は、ひとまず幕を下ろしました。
だがしかし、ゼゾッラは？
果てしない凍てついた砂漠をさまよい、甘い恋の果実を前にして、あと一歩と言うところでまたしても、闇の中に引き戻されたロードピスの魂はどこへいったのでしょうか？

最終話『名もなき小鳥とハシバミの木』

『名もなき小鳥とハシバミの木』

その百と一回目の生において、ゼゾッラであった魂は薄い殻の中で目覚めました。
くちばしで黒い天蓋を突き破り、濡れた体を卵の殻から引きづり出しました。
それから、魂はようやく、予告もなく、自分を襲った災難と絶望に浸ることが出来ました。
あと一歩だったのに、あと一日待てば、千年の想いが報われる筈だったのに……。
いったい、私の身に何が起こったと言うのか！！
ハンナが茶にこぼした毒は強く、ゼゾッラは死の瞬間の出来事を憶えていませんでした。

ファラオの魂を宿した王子と、後に残した家族のことが死ぬほど気になりました。
もはや、いつものように、人間に生まれ変わるまで死に続けて、ゆりかごからやり直している余裕はありません。
すぐさま、王国に引き返し、何が起きたのかを確かめなければ！

ゼゾッラの生まれ変わりであるひな鳥は、他の兄弟を押しのけ、親鳥が持って来た芋虫やバッタや、人間のあまり好まない生き物を貪欲に丸のみしました。
そうして、たっぷり栄養をとり、ひな鳥が使える限りの魔法の力を羽根の隅々まで伸ばし、どんどん体を大きくしていきました。
卵の殻を破ってからわずか三日後、あっと言う間に成鳥になった白い鳩は、驚き戸惑っている親と兄弟たちを残して、巣を飛び立ちました。

それからの旅は、魂が今まで潜り抜けてきた転生の旅路に劣らず、辛く長いものでした。
小鳥に生まれ変わったせいで、魔法の呪文が使えなくなったゼゾッラは、羽根と知恵の力だけで、地球を半周することになったのです。
鷹の爪を避けるために、暗い森の枝の間を恐る恐る飛んだこともありました。
羽根を休めた農家の屋根裏で、残酷にひらめく猫の前足をかわしたことは一度や二度ではありません。
ときには旅人のように大陸を渡る気流の力を借り、ときには大海原を横切る船の舳先に運ばれて、ついに鳩はゼゾッラの家族がいる王国へ辿り着きました。

戻ってきた時には、すでに四年の時が過ぎていました。
恐ろしく長く、何世紀もの時間に匹敵する四年でした。
巣を旅立った時、真っ白だった鳩の体は汚れ、土と埃の色に染まっていました。
疲れた翼に鞭打って、鳩は懐かしい我が家を目指しました。

さて、城下町にいたる道の途中に、死者の眠る墓地がありました。
墓地の上を飛ぶ時に、鳩は一組の墓石を見つけ、雷に打たれたように舞い降りました。
墓石の一つは鳩の前世であったゼゾッラの、そしてもう一つは……絹商人のものでした。

墓銘によれば、ゼゾッラが亡くなったわずか二年後に、夫も妻の後を追ったようです。
墓石の上に止まり、その上に刻まれた商人の名を読むうちに、悲しみの矢が鳩の胸を貫きました。
商人の眠る土の上に、一滴の涙を残して、鳩は再び飛び立ちまし

た。
涙は地に落ちて黒い染みとなり、その染みの中から、青い芽が顔を出しました。

記憶している道筋をたどりながら、鳩は飛び続けました。
街の様子は四年の間、ほとんど変わっておらず、ほどなく翼は鳩をゼゾッラの屋敷に運びました。
お屋敷の前に、絹商人の紋章をつけた大きな馬車が、止まっていました。
馬車の中から、現れた女を見た瞬間、鳩は甲高い叫びを上げました。

『ハンナ！！！』

高価な衣装を纏い、頭に白い筋が混じっていたもの、そこにいるのは確かに、使用人のハンナでした。
だけど、ハンナはなんと変わり果てていたことでしょう。
ふっくらとした頬はナイフで削られたようにこけ、艶やかだった皮膚は土気色に染まっていました。
ハンナが顔を上げたとき、鳩は彼女の目が、沼の水のようにどろりと濁っていることに気づきました。
母親の後に続いて二人の娘が下りてきましたが、素直で可愛いらしかったころの面影はありませんでした。
お金がもたらす堕落と傲慢が、ぶ厚い脂肪のように、ふたりの顔を覆っていたのです。

その時、屋敷の扉が開き、汚らしいぼろ布の塊が、転がり落ちるように階段から下りてきました。
老婆のように灰色の髪をしたその人は、ハンナの前で、深々と頭を下げながら言いました。

「おかえりなさいませ、お義母さま……」
「ただ今、娘や。私が頼んだ仕事はちゃんと終わったんだろうね」
ゼゾッラだった鳩は、驚きのあまり、もう少しで屋根から滑り落ちそうになりました。
灰と油汚れの隙間から見えたのは、紛れもなく、彼女の娘の顔でした。
ゼゾッラの娘は、猫を前にしたネズミのように震えながら、義母の問いに答えました。

「家のお掃除は終わりました。洗濯物も、でもお食事の用意だけはまだ終わらなくて……」
「はあ？　あたしたちが帰ってくるまで、一時間もあったじゃないか。さては、お前、あたしたちを飢え死にさせて、財産を独り占めしようって魂胆かい？」
「そんな、とんでもない、本当に時間がなかったのです……」娘の青い目に涙が盛り上がりました。
「どうだかわかったもんじゃないよ。それに、もしわざとじゃなかったら、それはお前が愚図だって証拠さ」

灰にまみれた少女は何ひとつ言い返さず、ただ唇をかみ締め、うつむくばかりでした。
ハンナとその不器量な娘たちは、少女の前を通って、ゆうゆうと階段を上っていきました。
と、ハンナが屋敷の扉の前で、足を止めて少女に聞きました。

「そういえば、今日がなんの日か、覚えているかい？」
「王子さまのために、舞踏会が開かれる日です！」
「そうさ。今夜は、みんなに休みをやろうかと思っているんだよ。

街を上げてのお祭りで、お店を開けてても、商売にならないからね」

汚れた顔の中でも、なお美しい少女の目が光りました。

その表情を見れば、彼女が何を望んでいるか、火を見るよりも明らかでした。

だが、ハンナは毒のたっぷり篭った笑いを浮かべると、

「だから、今夜はお前に、他の使用人の分まで働いてもらうよ」

まだ喜びの表情を浮かべたまま、少女は無惨にも凍りつきました。

それを見たハンナが、山羊の角のようにねじけた笑い声を上げました。

「お城の舞踏会に連れて行ってもらえると思ったのかい！　馬鹿な子だね。いつも言っているじゃない。お前みたいな、みっともない娘を人様の前に出せるものか。この醜い、醜い、灰被り（シンデレラ）め！」

言葉の鞭でじっくり少女を打ち据えた後に、ハンナは悠然と屋敷の扉をくぐりました。

ふたりの娘たちも、侮蔑に満ちた笑い声を少女の背中になすりつけながら、母の後に続きました。

少女は冷たい路地に立ったまま、石のように動きませんでした。

ぎゅっとぼろ布を抱き寄せたその背中が、さらに小さくなったように見えました。

鳩の中にいたゼゾッラは、この様子を見て、怒りのあまり羽から火が吹き出すかと思いました。

今や、彼女にも誰がゼゾッラを殺し、絹商人の妻の座を奪い取ったのか、はっきりとわかりました。

『おのれ、ハンナ！！　私を殺すだけでは飽き足らずに、娘まで！』

鳩はまるで猛禽になったような勢いで、屋根を蹴って飛び出しました。

たとえ小さくても、魔法を使えなくても、鳩には鳩の復讐の仕方があります。

目指すのは、かつてゼゾッラのものであった部屋の窓辺。

かすかに開いた窓の向こうに、ハンナが化粧台に向かっているのが見えました。

なんというチャンス！　復讐をものにするのは今しかありません。

『くちばしで、その汚らわしい目玉を抉り出してやる！』

鳩がまさに家の中に飛び込もうとしたその時、ハンナが顔を上げて言いました。

「ゼゾッラ！」

驚いた鳩は、空中で急停止して、窓さしの上に降りました。

一瞬、正体を見破られたかと思いました。

だが、ハンナは振り返ることなく、その目は鏡に映る自分の顔に見つめています。

「ゼゾッラ……」ハンナはもう一度言いました。「認めるわ。お前の勝ちよ、ゼゾッラ。あの人は、最後までお前を愛していたわ。そして、今はお前の側で眠っている。あの人を助けた私じゃなくて、あの人を殺そうとしたお前のっ！！」

喉から搾り出す言葉の一つ一つに、血が滲んでいました。

ハンナの目から涙がこぼれ落ちましたが、その唇は笑っているようにゆがんでいました。

「お前は死んでしまった。もうどうやっても復讐は出来ない。でも、あの子……お前にそっくりな娘がまだ残っているよ。あの人を亡くして、あたしの人生は台無しになってしまった。だからお返しに、お前の娘の人生を台無しにしてやるよ！　母親のお前がしたことを、娘が償うことになるのさ！」

ハンナは金属を擦りあうような甲高い声で笑ったかと思うと、わあっと泣き崩れました。

尖った両手の爪で、髪の毛と頭をめちゃくちゃに掻きむしりました。

生え際や首に残る傷跡から見る限り、ハンナは二年の間、毎日これを繰り返しているようでした。

太陽である夫と共に、ハンナは正気までも失ってしまったのです。

むせ返るほど濃厚な狂気の匂いに押され、鳩は逃げるように窓辺から飛び去りました。

怯え、取り乱した鳩は、唯一つの心のよりどころを求めて羽ばたき続けました。

色とりどりに花咲く屋根を越え、年経た傷だらけの城壁を越えて……。

探し求めていたその人はお城の中庭にいました。

柔らかだったリンゴの頬は日に焼けて引き締まり、たくましい体からしなやかな手足が伸びています。

幼かった王子は四年の間に、ますます古の王、アマシスに似てきました。

王子は石のベンチに座り、その形のいい指で薔薇の花をもてあそ

んでいました。
鳩はベンチの手すりに止まると、鳥族に伝わる愛の歌を王子に唄い聞かせました。
「おや、お前は鳩の癖に、雲雀のように美しく歌うのだね」
王子が微笑みかけると、西に傾きかけていた太陽が、明るさを取り戻したように感じられました。
鳩は石の上を跳ね回りながら、愛する人の掌に飛び乗りました。
近くから覗き見る王子は、年の割りに大人びた顔立ちをしており、その目元には深い悩みの影が刻み込まれていました。
「心から、僕を怖がらないのは、お前ぐらいのものだよ」王子は苦悩に満ちたため息をこぼしました。「お城にいる人間、皆が僕を恐れている。無理もないことだ。僕は狂っている。自分ではっきりそうと分かるほどに……四年前から、一人の女性の影が、僕の目蓋の裏を焼きついているんだ。以来、その人のことを除いて、何もまともに考えることができない。食べ物はぜんぶ灰の味がするし、春の日差しも僕には氷のようだ。あの人を愛している。だけど、いつまでこんな苦しみが続く？　こんな思いをして生きていくぐらいなら、いっそのこと……」
王子は泣きませんでした。泣くには誇り高く、強すぎる人でした。
だが、小鳥にささやくその声には、塩辛く舌を刺す、悲しみの味がしました。
ロードピスだった魂は、王子の周りを跳ね回り、鳩の声で訴えかけました。
『王子さま、私はここにいます！　貴方に呪文をかけた女、貴方が探している女はここにいます！』

だが、魂の声も、人間の耳には小鳥のさえずりにしか聞こえません。
王子はただ悲しげに微笑みながら、鳩の翼をなでるばかりでした。
ついに、耐え切れなくなり、魂は王子を残して、その場から飛び去りました。

◆　◆　◆

冷たく冴えわたる月の下を、鳩は飛び続けました。
まだ魂に残っている魔法の力は、やがて来る未来の幻を、魂の目に映し出しました。
ゼゾッラの娘は灰と煤の中に埋もれたまま、若さも喜びも知らず、萎びていくでしょう。
少女を呪ったハンナは、自分の憎悪に心と内臓を食い荒らされ、苦悶と後悔の裡に死んでいきます。
残されたハンナの娘は、遺産を奪い合った挙句に、お互いの喉笛を食い破って亡くなります。
そして、王子は……。
ロードピスが愛し、ゼゾッラが全てと引き換えに手に入れようとした王子は、自分を縛る魔法から逃れようと、無謀な狩りや戦争に挑み、無残な最期を遂げることになるのです。
『これがわたしのやったこと……ミダス王は触れるもの全てを金に換えて餓死したが、私は手に触れたもの全てを苦い灰に変えて、愛

した者たちを餓え死にさせようとしている！』

今このときになって初めて、魂は自分が歩いてきた旅路を振り返りました。

そして、背後に残してきた凍てついた足跡を見て、激しい罪の意識に苦しみました。

目に見える未来の映像の一つ一つが、鉄槌となって、魂の中にある花を打ち付けました。

花を覆っていた黒い氷の殻はひび割れ、砕け散りました。

だが、その中に入っていたのは、ロードピスの薔薇ではなく……一握りの塵だけでした。

ついに翼が限界にいたり、鳩は墜落するように地面に降り立ちました。

そこは、澄んだ水の流れる小川のほとりでした。

偉大なナイルとは比べ物にならない、慎ましいその流れの側で、鳩は舞い始めました。

腕の代わりに羽根を使い、つま先の変わりに爪で地面を踏みました。

千年前のロードピスの稲妻の舞とは比べ物になりませんでしたが、それでも鳩は自分の魂を込めて踊りました。

踊るうちに、月が天を横切って、小川の上にやってきました。

すると、水面に映っていた月が盛り上がって、白く輝く水の塔となり、塔はゆらいで小さな女神になりました。

鳩は踊るのをやめ、魂の声で語りかけました。

『お久しぶりです。イシス、私を覚えておりますか？』

『覚えておるとも』淡く光る女神は言いました。『あれから千年経ったが、未だにそなたを越える踊り手は現れておらぬ。またしても、

あと一息というところで、しくじったようだな、薔薇よ』
『女神よ、お願いがあります。今一度、私にゼゾッラの姿と魔法をお与えください！』

鳩は息も絶え絶えに、女神に訴えかけました。
長旅と踊りの疲労、夜の空気が、鳩の体から熱と一緒に命を奪おうとしていました。
だが、女神は冷たく、突き放すような眼差しを鳩の中の魂に向けました。

『何を世迷言を言っておる。そなたには、私が与えた無限の時間があるではないか。なぜ、脱ぎ去った昔の衣を欲しがる。また、死んでやり直すのだな、ロードピス』
『ロードピスはもういません！』鳩は叫びました。『……ナイルで溺れ死んだあの娘はもういないのです。ロードピスの薔薇は、この魂の中で朽ちて塵になりました。ようやくそのことがわかりました。私はゼゾッラ、灰被り（シンデレラ）の母、ゼゾッラなのです！！』

砕け散った魂の花の欠片が、言葉の中で哀しく光っていました。
魂の叫びは闇の中を響き渡り、尾を引く木霊を残して消え去りました。
風に乗って再び静寂が、夜に満ちた時、鳩は地面に倒れ伏していました。
もう立つだけの力も、残されていなかったのです。
しかし心なしか、女神の鳩を見る目が、温かくなりました。

『そこまで言うのなら、その願い、聞き届けてやろう。だが、ここはエジプトの地から、遠く離れている。我が加護は本来の半分、真夜中までしかもたない。真夜中が過ぎた後、そなたは生まれ変わりの力を失い、人として記憶も失い、ただの小鳥となるのだ。それで

も良いか？』
『覚悟の上です。真夜中までなら、十分間に合います』
『そして、魂よ。そなたは、私が与えた生まれ変わりの力を使って、ずいぶんと悪さをしてきたな。その罰も一緒に受けてもらおう。そなたはゼゾッラの顔と呪文を取り戻す。だが、娘に対して、母親と名乗ることを禁ずる。娘は母に救われても、そのことを知らず、ゼゾッラに感謝することもないであろう』

鳩は沈黙しました、生命の日が消えるその一秒前まで。
そして死の瀬戸際で、女神の言葉に答えました。
その答えとは……。

◆　◆　◆

灰被り（シンデレラ）と呼ばれたその娘は、たった一人で月を眺めていました。
周りにはやりかけた山のような仕事が、彼女を待っています。
しかし、シンデレラには指一本動かす気力もありませんでした。
このまま、何もせずに、継母が帰ってくれば、また酷く鞭打たれることになります。
そのことさえも、シンデレラにはどうでもよく感じられました。

感情や生きる力を奪う、青い悲しみが少女の胸の中にたまっていました。
「なぜ、こんなことになってしまったんだろう」幾度となく繰り返された疑問を、白い息と一緒に吐きだしました。

シンデレラの記憶にあるハンナは、あんな意地悪で残忍な女ではありませんでした。

滅多に手を触れてくれない母に変わって、髪を結ってくれたハンナ。

悪い夢を見て眠れない夜に、蜂蜜入りの甘い牛乳を温めてくれたハンナ。

悲しい時に歌を歌ってくれたハンナ、寂しい時に一緒に遊んでくれたハンナ。

血を分けたゼゾッラが死んだ時、少女は悲しんだが、ハンナが新しい母親になってくれるとわかって、その悲しみが癒された気がした。

事実、ハンナは理想的な母親でした。ほんの二年前までは……。

優しい父が死んだその日から、継母は豹変しました。

悪鬼のような顔で、少女を罵り、鞭打ち、奴隷のように酷使しました。

少女を本名ではなく、灰被り（シンデレラ）と呼ぶようになりました。

仲が良かった二人の姉まで、母親の毒にあてられたように変わってしまいました。

それでも、シンデレラは信じていました。

今の継母は悪い病気にかかっているだけなのだと。

何時か優しいハンナが戻ってくると思って、我慢してきました。

でも今日は、あの門前での仕打ちは、とても辛抱の出来るものではありませんでした。

開けた窓の向こうに、白く輝くお城が見えます。

今夜、あそこで王子さまの誕生日を祝う宴が開かれています。

盗み聞いた姉たちの話によれば、王子さまのお嫁を探すための舞踏会があるとか。
別に、自分が花嫁に選ばれるとは思うほど、自惚れていたわけではありません。
ですが、このまま、華やかな世界とは無縁の人生を送るのかと思うと……。
少女は胸の中にある深い海に溺れてしまいそうになるのでした。
その時、屋敷の呼び鈴を鳴らす音がしました。
「こんな時間に、誰だろう。いつもなら、もうお店は閉まってるのに……」
子供の頃、父親が戸締りをしつけるために、教えた恐ろしいことが頭を過りました。
泥棒や悪党を警戒しながら、シンデレラは覗き窓を使って、外を見ました。
そこには、優雅な夜を人の形に切り抜いたような、貴婦人が立っていました。
その人はにっこりと笑って、シンデレラに言いました。
『開けておくれ、可愛いお嬢さん。貴女に会いに来たのよ』
貴婦人は少女の名前を呼びました。
灰被りではなく、シンデレラ自身忘れかけている、彼女の本当の名前で。
気付けば、開けた記憶もないのに、扉は外に向かって開かれていました。
月明かりの中を、貴婦人は滑るように家の中に入ってきました。
その人の着ている黒いドレスは光に当たると、孔雀の羽根のよう

に色を変え、帽子には黒玉のカラスの羽根が差してあり、宝石の形をした星が散らしてありました。
その立派な装いを見た、シンデレラは自分のみすぼらしい格好が急に恥ずかしくなり、汚れた手をもっと汚れたスカートで隠しました。
泣きそうな顔で俯く少女に、貴婦人が綿のように柔らかい声で話しかけました。

『さあ、お嬢さん、そろそろ時間よ。早く支度をしなくちゃ』
「あの、時間って、何のことですが、それから貴女はどなたですか……」
『もちろん、舞踏会の時間よ』自分の名前については答えずに言いました。
「舞踏会……い、いけません。とても、無理です！　だって……」

「こんなに仕事が残っている」、そう言おうと顔を上げた少女は、途中で言葉を失いました。
城壁のように彼女を囲んでいた仕事が、ひとつ残らず片付いていたからです。
部屋は埃一つ無く磨き上げられ、商品は完璧に陳列され、非の打ちどころがありません。
正体不明の存在に出会った時に感じる恐怖が、ぴりぴりと体を痺れさせました。
シンデレラは震える声で言いました。

「で、でも服が、こんなみっともない格好じゃ、王子さまの前に出られない」
『あら？』と貴婦人が笑いました。『何を言っているのかしら、鏡を見てごらんなさい』

シンデレラの肩を掴み、店の中に置いてある姿見の方に向けさせました。
今度は恐怖の代わりに、喜ばしい驚きが、シンデレラの胸を貫きました。
鏡に映っているのは、あらゆる女の子の夢の結晶でした。
純白のドレスを身につけたその子は、まるで処女雪に反射した月の光のよう。
ドレスの裾から覗く手足は、店に置いてあるどの絹も及ばないほど白く滑らかで、皮膚の下からぼんやりと光を放っているようでした。

シンデレラが信じられない思いで、自分の手を見ると、それは確かに鏡に映っているあの少女の手でした。
指には洗濯や皿洗いで出来たあかぎれも、油汚れもなく、ほんのりと甘い薔薇の香水の匂いがしました。
長い間、一人で苦しんできた少女は、目の前の光景が信じられませんでした。
こんな幸せが、自分の人生に起こるわけがありません。
きっと何か落とし穴があるはずです。

「い、今から、行っても間に合わないわ。さっき、夜の十一時の鐘があったから、もうすぐ舞踏会が終わるもの」
『足の速い馬車があればいいのよね。さあ、外に行って見てごらんなさい』

不思議な貴婦人に促されるままに、シンデレラは外に出ました。
そして、そこにあるものに、三度驚かされることになりました。
家の前に止まっていたのは、小さな屋敷ほどもある黄金の馬車でした。
見た目はまるでかぼちゃのようで、大きな車輪にはルビーが散り

ばめられています。
この馬車を引くのは、竜と見紛うほど、大きく誇り高く美しい白馬たち。
御者席では、鼠のような顔をした召使いたちが、少女を待っています。

『ああ、一番大事なものを忘れるところだったわ。舞踏会へ行くに、靴がなくちゃ、踊れないわよね』

呆然と立ち尽くす少女に、貴婦人が胸に抱いていたものを渡しました。
処女雪のドレスや黄金の馬車ですら、色褪せるほどの美がそこにありました。
それはダイアモンドよりも美しい、ガラスの靴でした。
その靴は空気のように透明でしたが、中には生きた星屑を閉じ込めてありました。
魚のように泳ぐ光のしずくは、夜の闇を月よりも明るく優しく照らし出しました。

何千という感謝の言葉が、少女の頭の中に浮かんでは消えました。
それらが口から飛び出すよりも先に、胸の奥にたまっていた想いがあふれ出しました。
シンデレラは、ガラスの靴を抱いたまま、貴婦人の胸の中に飛び込みました。
その冷たい頬に、キスをあめあられと降らしました。

「ありがとう！　ありがとう、魔法使いのおばさま、ほんとに……」
『いいのよ。いいのよ。でも、気をつけなさい。真夜中にはかならず、家に戻るのよ。そうしないと、私が上げた服も馬車もすべて消

えてしまうから』

喜びで喉が詰まっていた少女は、ただうなずくことでしか出来ませんでした。

貴婦人はどこか強張った笑顔を、シンデレラに向けていました。

絹の手袋に包まれたその両手は、少女の体を触れることを、迷っているみたいに空中をさまっていました。

「……初めて、貴女を見た時、お母さまに似ていると思った」しみじみと貴婦人の顔を見ながら、少女が言いました。「でも、あらためて見ると、ぜんぜん似ていないわね。お母さまは美しいけど、冷たい人だった。貴女は綺麗だけど、とても優しいわ。お母さまの髪は冬の曇り空、でも貴女の髪は春の金の朝やけだわ」

魔法使いの婦人は黙って、シンデレラの体を強く抱きしめました。

その口元は笑っていましたが、目は涙のように光っていました。

◆

◆

◆

両手で白い宝石をそっと差し出すように、ゼゾッラは娘を送り出しました。

シンデレラを乗せた黄金の馬車が姿を消すと、力を使い果たした魔法使いは、再び目に見えない霊の姿に戻りました。

ゼゾッラは透明な流れ星のように、家々の壁を通り抜け、屋根の上の猫を驚かせながら、馬車のあとを追い掛けました。

黄金の馬車は早すぎた太陽の馬車のように、街中を照らしながら、お城を目指しました。
お城の門を守ってた衛兵たちは、見慣れぬ巨大な馬車の行く手を遮ろうとしました。
だが、御者台に座っていた魔物の視線を浴びると、自ら門を開き、シンデレラたちを招き入れました。

ゼゾッラの霊は馬車に続いて、お城の中に入りました。
大広間に続く階段に立つと、石やレンガを見通すその目で、中の様子を眺めました。
宴はとうに佳境を越え、料理はすべて胃袋に収まり、踊るペアはわずか、疲れた賓客たちは冷えた酒をすすって、体を休めていました。

国王と王妃は、並んで座りながら、愛する王子の様子を盗み見ていました。
今宵、集めた美女の中に、息子の病んだ心を癒す相手がいないかと期待していたのです。
だが、王子は着飾った乙女たちには目も向けずに、手の中の短剣をいじっていました。

何か大事なことを忘れているような気がしてなりませんでした。
あれは小さなもの、手袋に似て手袋ではなく、靴下にいちばん近く、そうです、靴です。
だが、なぜ靴のことがこんなにも気になるのか……。

国王と王妃は顔を見合わせ、ため息をつきました。
国王らの失望は伝染病のように、廷臣らと賓客の間にも広がりました。
火の消えかけた暖炉のように、物憂い熱気が、舞踏会の席を支配

していました。

シンデレラは、その炉の中に放り込まれた新しい火種でした。
真っ白なドレスを着た少女が大広間の床を踏んだ瞬間、炎と燃え上がる視線が彼女一人に集中したのです。
膝の上にあった短剣が石のタイルに落ちる音を聞いて、初めて王子は自分が立ちあがったことに気が付きました。
まるで申し合わせたように、シンデレラと王子は歩み寄りました。
無言のまま、大広間の中央で、手に手をとり、そしてステップを踏んだ瞬間……。

世界が二人を中心に回り始めました。

その時、シンデレラと王子が踊ったダンスのことを言い表す言葉はありません。
千もの詩人たちが、無駄な努力の果てに、絶望して降参しました。
だから、あの時、二人の周りで起きていたことを説明しましょう。

大広間にいた全ての人間が沈黙しました。
国王も王妃も、大臣も将軍も、貴族も平民も、誰一人例外なく。
ハンナは気絶しそうなほど青ざめ、彼女の娘たちは惚けた顔で立ち尽くしていました。
音楽は鳴っていたかどうかは……わかりません。
演奏はあったかもしれません。なかったのかもしれません。
どっちにしろ、それは大した問題ではありませんでした。
目の前で踊る二人こそ、この上ない、最高の音楽だったのですから。

その場にいた人々は同じような幻を見た、と言います。
ガラスと銀で飾られた大広間は、いつの間にか棕櫚の葉がそよぐエジプトの大地になり、壁があるはずのところに巨大なピラミッドと若かったスフィンクスが見えました。
シンデレラと王子の姿はかすみ、代わりに、薔薇の顔と麦色の髪を持った乙女と黒豹のように精悍な青年王がそこにいました。
だが、空気に混ざっていたナイルの水は臭いは何時しか消え、人々は自分たちがお城の大広間に戻っていることに気付きました。

ガラスの靴が星屑を散らしてステップを踏むたびに、王子を縛っていた魔女の呪いが一本ずつ弾け飛びました。
そしてついに、最後にして最大の呪いが、その場にいた人々の目に金色の爆発の残像を刻み、耳に断末魔の幻聴を残して、消え去りました。
もはや、そこにアマシスはなく、ロードピスもなく、お互いの名も知らずに出会った、一人の少年と少女が残されました。

太陽が東から昇るように自然に、王子は少女を抱き寄せました。
目は目を見つめ、指は指に絡み、吐息は混ざりあい、そして唇は……。
しかし、その時、無情に広間の大時計が夢の終わりを知らせました。

運命の時、真夜中が近づいたのです。
シンデレラの頭の中に、親切な魔法使いが残してくれた注意が蘇りました。
『真夜中にはかならず、家に戻るのよ。そうしないと……』
シンデレラは、優しく王子の腕から、体をもぎ放しました。
「ごめんなさい。私、もういかないと……」

「待ってくれ！　せめて、君の名前だけでも教えてくれ！」
「お許しください。お願いです。どうかお許しをください」

王子は逃げて行く少女の後を追いました。
大魔法使いのかけた呪いは、全て解かれました。
しかし、ゼゾッラの娘が、王子に新しい魔法をかけたのです。
呪文も、妙薬も必要とせず、しかもそのいずれよりも強い、この世界で最も古い魔法を。

王子は少女の手を掴みとろうとしました。
しかし、息が届くほど近くにいるはずなのに、王子の指はことごとく空を切りました。

「誰か、誰か、その子を止めてくれ」

王子は近くにいた兵士たちに命じました。
兵士らはシンデレラの行く手を塞ごうとしました。
しかし、まるで透明な手に押しのけられたみたいに、近づくことも出来ませんでした。

シンデレラは走りました。
恐怖に震え、体を真っ二つに引き裂かれたような痛みに泣き叫びながら。
そして、知らぬうちに、外の階段で待つ、ゼゾッラの霊のもとに向かっていたのです。
次の瞬間、娘の肉体が母の霊と重なりました。
少女は懐かしい母の香りを嗅ぎ、頬に優しい口づけを感じました。

顔を上げたシンデレラの目に、魂のごとく、月へ登っていく一羽の白い鳥が見えました。

動きを止めた拍子に、少女の足から、ガラスの靴が抜け落ちました。

◆　◆　◆

さあて、この後のお話は、大体貴方も知ってのとおりですよ。
夢のような少女は消えて、ガラスの靴だけが王子さまの手元に残りました。
王子さまは、ガラスの靴に会う小さな足を探して、国中にお触れを出しました。

ええ、あの時のお城の様子は見ものでしたよ。
何しろ、国中の女性が我も我もと、押しかけてきましたからね。
舞踏会に参加していた年頃の娘さんならともかく、子供が十人も生んだおっかさんから、曾孫までいそうなお婆さんまで。

ガラスの靴は、性格の悪い美食家みたいに、女の足を呑みこんじゃ吐き出しましたね。
こんな不味い足に履かれてたまるか！　とでも言いたげにね。
ここだけの話、王子さまの花嫁を目指して、魔女も何人かやってきたそうですよ。

彼女らは魔法を使ってずるをしたんですが、ガラスの靴の魔法は絶対でした。
魔女たちの呪文は、要塞の壁に投げつけたパンくずみたいに跳ね返されたんですって。

それっきり、魔女たちは二度とやってきませんでした。
ゼゾッラはもうこの世にいませんでしたが、大魔法使いの名前はまだ生きていたのです。

ハンナは……。
シンデレラの狂った継母は、魔女も思いつかないような恐ろしいことしました。
彼女は靴のサイズに合わせて、二人の娘の足を（姉は爪先を、妹はかかとを）切り落としました。
当然、ガラスの靴にそんなずるは通じるはずもありません。
靴は姉妹の足を呑みこんだ瞬間、血が出るまで締め付けて、吐き出したんです。

ああ、自業自得とは言え、あの時のことを思い出すたびに腿の筋肉がひきつるわ。
おや、私の松葉つえが気になるのかしら？
それとも、靴に隠されたこの足が気になるのかしら？
お見せしましょうか、あまり食事時に見るようなものじゃないけど。

ふふふ、貴女、気丈な方ね。
顔いろはちょっと青いけど、悲鳴一つ上げなかったわね。
でも、これでわかったでしょう、私は姉の方だったのですよ。

でもひとつ、私たちの母親について弁明しておきましょうか。
ハンナは噂話に言われるように、欲にかられて、娘たちの足を切り落としたんじゃないですよ。
あの夜、母さんは舞踏会に現れたシンデレラを見て、ゼゾッラが生き返ったと思ったのよ。
そして、お父さまが死んだ時の記憶がよみがえって……。

王子さまを魔女から守ろうとしたんだって、母さんは言っていたわね。

私たちが、血と涙の滴を残してお城を立ち去ったあと、王子さまがあの子を見つけたわ。

もう街にいる女の人で、ガラスの靴を試していなかったのはあの子だけだったのよ。

あの子は嫌がったわ。

本当の自分を知られるぐらいなら、死んだ方がましだって思ってたぐらいよ。

でも、ことわざにもあるでしょ、王子の愛と運命を拒める人はいないって。

残った私たちは、お義父さまの眠っている墓場へ行ったわ。

恥ずかしさに耐えきれなくって、自分で命を断とうとしたの。

そこへ、あの鳥がやってきた、ゼゾッラの魂の名残を留めた鳩が。

鳩は私たちに、貴女が聞いた、この物語を唄ってくれたわ。

私たちはロードピスの苦しみとゼゾッラの罪を知った。

自分たちの罪とシンデレラと呼ばれた妹の苦しみを知った。

そして王子さまのように、自分で自分を縛る呪いから、解き放たれたの。

今では、私たちはみんな幸せよ。

王子さまじゃないけど、私と妹には、自分にぴったりの愛する旦那さまがいるわ。

私たちの子供たちは、あの子の王子さまやお姫さまたちと仲良くやっているわ。

母さんも……憎しみの悪い魔法から自由になって、義父さんを愛する心だけがのこった。

今じゃすっかり可愛いお婆ちゃんよ、意地悪な継母の面影なんてどこにもありゃしない。

うん、なぜ、貴女にこんな大事なお話をしたかって？
それは、貴女の目の中に、ゼゾッラや昔の母さんに似た光が見えたからかもしれない。

もし、そうなら、街外れにある墓地に行きなさい。
そこには、ゼゾッラとその夫の墓から生えた、一本のハシバミの木があるわ。
貴女の心に凍った棘だらけの花があれば、木の枝に宿った白い鳩の幻がお話しを歌ってくれるわ。

恋のために千年を生き、千年の間苦しみ、
ついに魂を縛る鎖をほどいて、大いなる愛を手に入れた、

シンデレラの魔法使いの恋の物語を……。

Ｆｉｎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5554q/

三人のシンデレラ

2011年2月17日01時04分発行